

希望を耕す

場の産業

東京大学教授・建築学
松村秀一
Shuichi Matsumura

連載を始めるにあたって

東京大学出版会が『UP』という月刊誌を出している。昨年十月号の書評のタイトルに心ひかれた。人類学者の松嶋健さん著の『ブシコナウティカ―イタリア精神医療の人類学』（世界思想社）について東大教授で哲学者の中島隆博さんが書かれた書評で、そのタイトルは「希望を耕す―地域という思想」。福祉の世界などでも使われることのある言葉のようだが、この「希望を耕す」という言葉の素直さにドキッとさせられた。そして、人口減少社会の賭場口にある日本の時代性を受けての穏やかだが強い意志のようなものを感じさせる端的な表現に心打たれた。

そこに舞い込んだ本誌連載の依頼だったので、連載のタイトルには是非この言葉を借りたいと考えた。本誌の読者である建設業関係者にとって、大きな転換期にあつて、日々臨機応変な対応で戸惑いながらも前に進もうとする営為は必要だが、一方で、穏やかに強い意志をもって「希望を耕す」ことがとても大事だと思えるからである。建設業にとってこれからの「希望」

は何なのだろうか。いささか浅薄で場当たりのかもしれない私個人の考えの表明が、読者諸氏に「希望」に思いを馳せる場を提供できたら幸いである。

「箱の産業」とその果実

この一〇年ほど飽きもせず「箱の産業」から「場の産業」へ」という産業転換の必要性を、ここに書き散らかし、これをタイトルにした講演も繰り返してきた。

世界有数の高い密度の新築市場が、世界史上類を見ない長さで続いてきた高度経済成長期以降の日本という特殊環境の中で、ある意味先鋭的に育ってきたのが、これまでの日本の建築業、「箱の産業」である。この産業の使命は明確である。「きちんとした箱（建物）をきちんとデリバリーする」である。耐震性、耐久性、耐候性、省エネ性、居住性等のきちんとした箱を、きちんと約束の納期に約束の対価でお届けする。このことの確実な実現に産官学をあげて取り組んできたという総括に異論の余地はない。

しかし、各地の空き家やシャッター街に端的に表れているように、「箱」が余り過ぎる時代を

迎えている。そこに人口減少局面が重なる。従来通りの「箱の産業」のままでは大した希望が持てない。そのことは誰の目にも明らかだ。

有り余る「箱」。これは私たちのとても大事な財産である。半世紀以上にわたって、個人から企業、政府までもが営々と投資を繰り返して、それを受けて建設業の人々が懸命に働いてきたこととてつもない成果なのだから。住宅を例にとれば、日本の一人当たりストック数は〇・四八戸（二〇一三年）。先の大戦で建物を焼失することがほぼなかったアメリカのそれ（〇・四二戸、二〇一〇年）を大きく上回っている。いわば国民総出の継続的な投資により、今や日本は世界に冠たる建築ストック大国になったのである。

希望と「箱」の「場の産業」

これからの希望は、この有難い「箱の産業」の果実の上に描き出せるのだから、私たちはとても幸いな時代にいるのだと思う。もちろん「箱の産業」に執着していたのでは、たやすく希望を描けないわけだが、その執着心を捨てさえすれば耕すべき希望が見えてくる。

そもそも建設業の目的は、人々の豊かな生活環境を作り出すことである。そのための箱が十分に整ったのだとすると、次はそれを豊かな暮らしや仕事の場に仕立て上げることが使命になるはずだ。ところが、折角の箱が老朽化・陳腐化するに任されていたり、そこら中で捨て置かれている現実がある。

二〇一〇年代に入り、箱を新たにデリバリーするのではなく、町の中で空いている箱を豊かで楽しい暮らしや仕事の場に仕立て上げる活動が、各地で同時多発的に展開し始めた（写真は一例）。中心になつている人たちの専門は建築や建設分野に限らないが、彼らが希望を耕し始めたのは間違いない。私は、この希望を建設業の希望と結び付けて、「場の産業」と名付けた。肝心なのは、これはものづくりとは違うということ。当然ものづくりも一部に組み込まれるが、基本は場づくりであり、片仮名で表現すればサステナブルなコンテンツ産業という体になる。詳細は拙著『建築―新しい仕事のかたち 箱の産業から場の産業へ』（彰国社）に譲るが、希望を見出せる有力な分野であることは確かだと思ふ。



都心の空いていた中学校に様々なアート系のスモールビジネスと大小のイベントスペースを埋込み、隣の公園とつなげることで、町と世界に開かれたアートセンターを作り出した事例。2010年に事業開始。2013年には年間に80万人が訪れる拠点に育った。（提供：3331 Arts Chiyoda）